

2019年12月31日(火)

老球の細道517号

12月の言葉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

生活のメインになるバスケットボール関係行事が盛り沢山であった。そのための準備に時間を費やされ、毎日が充実何より。夢の中でもバスケットの練習に追われ、夜中に目覚めることも何度かあった。まだまだ夢を見ることに感謝。夜中の小便で目覚めることに負けてはいけない。今年も読んでいただきありがとうございます。

1・テレビから

◆「夢ってアカンと思うことをやらないとしようがない」〈NHK ニュース：民間ロケット新たな挑戦・スポンサー菓子メーカー社長の言葉〉：夢は想うもの、理想は近づくもの、目標は決意して成し遂げるものと今まで私なりに定義してきた。しかし、今や夢を目標のレベルまでハードルを下げている人たちがいる。すごい時代になった。立命館大学の新聞広告の中に次のコピーが「不可能は、いつか誰かが可能にする。ならば、その“誰か”になれ」。

◆「笑顔はすべてをポジティブにする」〈NHK 奇跡のレッスン：バレーボール日本女子代表コーチ・フェルハト・アクバシュ〉：子供たちに指導していると、笑顔で練習している子供たちが間違いなく上達する。笑顔と真剣さに満ちたコート雰囲気チームを変える。

2・新聞から

◆「異なる人々が集まればそこに摩擦が生まれますが、それは自然な作用です。私たちの生活に必要な炎を生むのも摩擦です」〈朝日新聞GLOBE：フィル・ウッド（都市専門家）〉：

Yesマンだけでなく、NO!を唱える人がいるからこそ、わが身を振り返り反省する。その結果、さらに良いアイデアがひらめき、レベルアップできる。裸の王様。

◆「今、国内では勝って当たり前のチームにいますが、世界には自分より大きい選手、うまい選手がたくさんいる。2016年リオデジャネイロ五輪は、準々決勝で米国に敗れました。負けるということは、まだ自分にはできることがあるということ」〈朝日：全国高校バスケット選手権開幕・渡嘉敷来夢〉：最後に勝つためには、その前に小さな負けを何度も経験すること。NCAAトーナメントではその前のリーグ戦で全勝しているチームより負けているチームが優勝するケースが多い。負けによってさらにレベルアップする課題が発見され熟練強化されていく。

◆「私たちは誰もいかないところに行く」〈朝日：社説「中村医師の死」・中村哲さんの言葉〉
世の中には私たちが知らないところですよすごいことを行動している人がいるものだ。しかも、70歳を超える老人である。どこにそんな情熱が隠されているのか？老一い！教えて。

◆「ギリギリまで粘る、最後まで粘る。終わりで楽しむ」〈朝日：加藤登紀子のひらり一言〉：コンサートの3原則だそう。まるでバスケット試合前に話すコーチのスピーチ。何事もNever give up! Never to late! ネバー、ネバー 納豆。